

日本初の立体交差、年内解体へ

北九州 JR折尾駅

大正時代の姿で復元された東京駅をはじめ、駅舎には国指定の文化財も少なくない。レトロ口を売りにする北九州市の門司港駅もその一つ。だが、日本初の立体交差駅で知られるJR折尾駅は、市が文化財価値の調査もせず、解体を急ぐ。十二日からお別れイベントが始まるが、住民らは「せめて解体前に調査を」と訴えている。



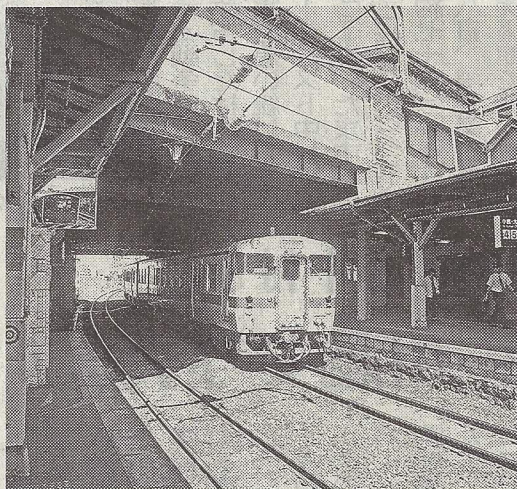
①年内に解体されるJR折尾駅
②日本最古の立体交差。地上は筑豊線、上には鹿児島線が走る＝北九州市で



今月三日、折尾駅を訪れる市は、駅舎を年内に解体する方針で、六日を最後に閉鎖された。七日からは新設された仮改札口が動きだす。

(中山洋子)

市、文化財調査せず



をカメラに収め、名残を惜しんでいた。「もったいない」「寂しい」とのため息が漏れる。駅周辺の再開発を進める市は、駅舎を年内に解体する方針で、六日を最後に閉鎖された。七日からは新設された仮改札口が動きだす。

市や地元商店街などは十二〜十四日にお別れイベントを企画。解体に向けてカウントダウンが始まる中、「考え直して」と求める声は根強い。

折尾駅は一八九一（明治二十四）年に開業している。木造二階建てで、一階は筑豊線、その上で鹿児島線が交差する。れん断が分かれるのか。

市文化振興課の西山陽子課長は「文化財価値の調査は所有者の要望で行うもので、これまでJR側から調査を求められていない」と説明する。

これに対しJR九州の広報担当者は「門司港駅の保存も折尾駅の解体も、市側から要請を受けて行う事業。文化財の申請をするもしないも、市の方針に従ってきた」。

総額三百五十億円の予算が見込まれる折尾駅や立体交差の改築工事は、提案した市が九割を負担する。駅前の区画整理なども合わせ、駅周辺では総額八百三十億円の事業が進められている。

市側は文化財調査を拒む理由を明らかにしないうち、西山課長に重ねて聞いても「調査がないから価値も不明」と理解しがたい回答に終始した。一方で、解体方針については「地元の意見を反映し保存のために先月末から」と強調する。

八幡製鉄所は「遺産」目指す

市内には旧官営八幡製鉄所があり、九州・山口の近代産業遺産の一つとして、世界遺産登録を目指している。なのに石炭輸送の核だった駅舎を解体するのはあまりにちぐはぐな印象だ。

同じ大正初期のJR門司港駅は国の重要文化財。こちらは逆に復元・保存のために先月末から